

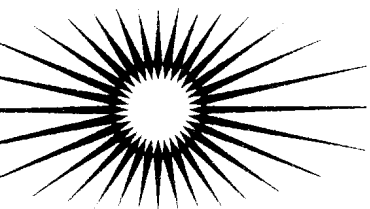
世界短篇小说全集

15

世界短篇小说全集

15 / 中国文学

奥野信太郎編



集英社版

世界短篇文学全集15

中国文学

幽霊妻 あじなお裁き他



昭和42年2月20日新装版発行

編者◎ 奥野信太郎

発行者 陶山巖

印刷所 凸版印刷株式会社

製本所 中央精版印刷株式会社

本文用紙 日本パルプ工業株式会社

クロース 日本クロス工業株式会社

発行所 株式会社 集英社

東京都千代田区神田一ツ橋二の三

電話 265-6111(代) 振替東京 15653

(落丁・乱丁本は本社で
お取りかえいたします) 定価 450

中国文学目次

うたものがたり／孟　　榮／奥野信太郎訳	7
幽　靈　妻／「京本通俗小説」より／村松　暎訳	39
菩　薩　蛮／「京本通俗小説」より／村松　暎訳	56
幽鬼のむれ／「京本通俗小説」より／村松　暎訳	68
番頭と若夫人／「京本通俗小説」より／村松　暎訳	84
拗　相　公／「京本通俗小説」より／村松　暎訳	98
口から出たわざわい／「京本通俗小説」より／村松暎訳	115
夫婦再会物語／「京本通俗小説」より／村松　暎訳	135
陳御史の金の簪／「古今小説」より／佐藤一郎訳	148
白　蛇　伝／「警世通言」より／佐藤一郎訳	176
白　玉　娘／「醒世恆言」より／佐藤一郎訳	211

美女と錬金術／「古今奇観」より／奥野信太郎訳	233
あじなお裁き／李 漁／藤田祐賢訳	253
婿の神眼／李 漁／藤田祐賢訳	268
復 讐／李 漁／藤田祐賢訳	293
いきなお裁き／李 漁／藤田祐賢訳	316
奇縁奇遇／李 漁／藤田祐賢訳	330
故 郷／魯 迅／佐藤一郎訳	351
柳 屯の女／老 舍／奥野信太郎訳	361
松 子／丁 玲／奥野信太郎訳	383
解 説／奥野信太郎	395

中国文学

うたものがたり（本事詩）

孟 奥野信太郎訳 榮

■孟榮

Meng Ch'í 唐代小説本事詩は孟榮の撰述であると伝えられている。孟榮は字を初中といい、かつて梧州に官吏として在任したという以外、詳しい伝記については未詳である。ただし本事詩がはたしてかれの撰述であるかどうかということも、また確言のかぎりではない。それは多くの唐代小説が、その撰述者の名を掲げているにもかかわらず、その実否を確言できないのと同断であるといつてよからう。

本事詩は唐代詩人の逸話集であり、またその詩ものがたりである。それはわが国の伊勢物語や大和物語が歌物語であるのと同じことである。臆測を逞しくすれば、日本の古い物語の下敷き——少なくともその様式については、この本事詩のような唐代の詩ものがたりの示唆があつたのではないであらうか。なんとなれば歌物語が歌序から演進したものとすれば、詩ものがたりは明らかに詩序から演進したものであり、歌序の体裁には詩序の体裁の影響がかなりはつきりと看取することができるからである。

本事詩は情感・事感・高逸・怨憤・驚異・微咎・嘲戯の七類に綱目をたてているが、これはかならずしもその内容にとつて重要なものではないので、訳文についてはすべてこれを除いた。

もともと、小説、ということばは古い中国語であつて、その本来の意味からいえば、街談巷説、道聽塗説の片言雙句を指したものであるから、この本事詩のようなものはその本筋をゆくものと称して可なりであらう。

あえてここに本事詩を訳載したのは、この全訳が従来出ていなかったということもあるが、もうひとつの理由は、いまここに述べたような含みもあつたからである。

鏡のふしぎ

陳の太子舎人徐徳言の妻は、帝叔宝の妹でした。秦昌公主という榮爵を賜り、世にもまれなうつくしいひとです。

ときあたかも陳国の政は乱れに乱れ、これではとても末永く添いとけることはむずかしいと知った徳言は、その妻に向つて、

「お前だけの才と繚繚とがあれば、たとえ国が亡びようとも、きつとまた時めく家に迎えられることであろう。ここで別れてしまおうとも、もし夫婦の縁があるならば、またあいたいと思う。ついでにはこれをそのときの証拠の品としよう」といって、ひとつの鏡をわり、その半分ずつをたがいに分けとり、

「正月十五日これを都の市場に売るがよい。もし生きながらえていたならば、その日自分も市場にゆくから」と約束しました。

やがて陳が亡びますと、はたしてその妻は越公の楊素の家に迎えられ、たいそう寵愛をうけることになりました。

一方、徳言は流浪の苦勞をかさねた末、やっと都までたどりつき、正月十五日、市場にくることができました。

鏡半分を売っている下僕ふうの男がいるではありませんか。しかもそれが見たいそう高い値段なので、みんな大笑いを

しています。

徳言はその男を自分の住居に案内し、食事を出して、くわしく理由を話しました。そして自分の鏡と、その男のもっていた鏡とを合せたのです。そこでこういう詩をつくりました。

かのひとと鏡去りにき

鏡あり かのひとあらず

月姫のすがたもみえず

月かげのむなしく照りて

この詩をうけとったかの女は、ただ涙にかきくれて、食も喉にとおりません。これを聞いた楊素は、いたましく感じ、まじめな態度で、さっそく徳言を呼びよせその妻を返した上、手厚く贈りものをしました。この話を聞きつたえたものは、だれしもみな感嘆したものです。

徳言は妻の陳氏と盃をあげ、陳氏に詩をつくらせました。

これやこの今日よろこび

新旧のひと相對す

笑啼も声をなきすて

ただ思う生きのかたきを

二人は江南の地に帰り、一生睦じくくらししました。

悲しい話

唐の則天武后の御代、左司郎中の喬知之という人がありました。その侍婢の竊娘は、世にならびない芸のあるうつくしい女でした。

知之はこの女ゆえに妻ももらわず、もっぱら竊娘を寵愛していたのです。武后の一族である武延嗣がこのことを聞きこみ、せひ一度あいたいということを望みました。それもとても止めることもできないような勢なのです。

ところがあつたが最後、自分のところにひきとどめ、一向返そうとはしないのです。

知之はたいへん憤慨して、そのために病氣になりました。そこでかれは詩をつくり、それを白い絹地に書き、門番にくさんの金をつかませ、竊娘のところへとどけさせました。かの女はその詩を読んで悲しみのあまり、その詩を書いた絹地を帯に結わいつけて、井戸に身を投じて死んでしまいました。

知之の詩を読んだ延嗣は、怖しい役人をつかわして知之をさんざん罵らせました。その詩というのはこういう詩でした。

われ富みて歌を好めば
財もて歌姫を召す

歌姫はわれに許して

舞すがた愛づるにまかす

君が閨深く閉ざさず

舞すがた人に観せしむ

眺めける人は無礼に

力もてあたら奪いぬ

君去りてわれ忍ばずの

涙しとど花と降り散る

とことわに高嶺の花ぞ

かくてわれ老いにけらしも

載初元年弥生のことでした。そして卯月の声を聞くと、知之は獄に投ぜられ、その年の夏八月にととう死んでしまいました。

昔のお前が

寧王曼という人は、わが世の春と時めき數十人の白拍子を蓄えていました。それもみな芸達者な粒よりの縹緞よしばかりです。

その邸の左隣に、餅を売ってくらしを立てている男が住んでいました。その妻は腰細でいろが白く、眼鼻立ちがくつきりとした美人でした。

王はみるなり一目惚れしてしまい、その夫に手厚い賜りも

のをやって、とうとうかの女を自分のものになりました。それからというものなみ外れた寵愛です。

一年たつてからです。王はかの女に、

「お前はまだあの餅屋のことを忘れないでいるか」とたずねました。かの女はなんともいわずにだまっています。王は餅屋を召しよせ、かの女にあわせました。

餅屋をみつめていたかの女の頬には涙が流れ、とてもたまらないような様子です。なみいる十余人の客たちは、いづれも当代の名士ばかりでしたが、王は客たちに詩をつくるようにいつけました。右丞の王維の詩がまず最初にできあがりました。

よその男のもちものだとて昔のお前が忘らりよか
花をみる眼のため涙口をきくのも臆劫な

今生の縁

開元年間中のことでした。国境守備兵たちに、宮中でつった綿入れを分けあたえたことがあります。

ある兵士が上衣のなかからこんな詩をみつつけ出しました。

守りにつける兵どもよ

この寒しろにいかで眠らん

わが手づくりの衣をおくるに

得給しひとはそもたれならん

心を糸にこめて縫いあげ

情はあつきここの綿

たといこの世にあわずとも

待たる縁またの世に

兵士はその詩を司令官に申告しました。司令官はさらにこれを元宗皇帝にごらんにいれました。皇帝は後宮中にこの詩を示して、

「この詩の作者はかくさずに申すがよい。けっして罰にあてるようなことはしないから」といつけました。

するとひとりの女官が進み出て、どうもすみませんでした、わたくしが作者ですと自白したので、皇帝は深くこれをあわれに思しめされ、詩をさがしあてた兵士と結婚させられました。そして、

「お前のためにこの世での縁を結んでやったのだ」と仰せられました。この話を聞いて国境守備兵たちはたいそう感動しました。

詩の功德

朱滔が兵をあげたときのことです。あらゆる階層の人々を軍に徴発しました。そしてかれ自身珠場で閲兵をしました。そのなかに容貌態度のりっぱな知的な男がいました。ものごしがいかにも上品なのです。そこで滔はこれと呼んで、

「そちはどういふ職業か？」とたずねますと、

「詩をつくることをやっております」と答えました。

「女房はあるのか？」

「はい」

さっそく妻によせる詩をつくらせてみますと、筆をとるやいなやたちまちひとつできあがった詩は、こういふのでした。

筆とりて詩をつくるはやすく

才になうはいとど憂し

陸みの衾なれたれば

寒き雁門征きがてに

身も細りては帯ゆるく

枕を涙しとどにぬらす

もし蕪をのこしなば

帰りて君の眉画かん

それではとこのうで妻に代つて詩をつくらせました。

世のつねならぬみだれ髪

嫁ぎの衣をきしままに

不老の胡麻のあらなくに

せめては君よ帰りこよ

浴は束ねた絹をあたえて、かれに帰ることをゆるしました。

詩のやりとり

詩人の願況が洛乗門のあたりで、たまたま三人の詩人仲間と苑中を遊歩し、流れのほとりに坐りました。そして流れてきた大きな梧桐の葉をひろつてみますと、それに詩が書きつけてあるではありませんか。

深き宮居の身にあれば

春を知らざるわびしきよ

木の葉に歌をかきちらし

あわれ知るべによせまほし

その翌日、況はずっと上流のほうから、詩を書きつけた木の葉を流しました。

鶯鳴きて花散りて

深き宮居にひと泣くか

水は東に流れ去り

ただよい出ずる歌の葉は

それから十幾日かたつてからのことでした。

ある人が苑中の春景色をたずねたとき、またもや詩を書き

つけた木の葉をひろいまして、これを況にみせました。その

詩というのはこうでした。

ただよい出でし歌あわれ

返り歌こそいみじけれ

波に浮かべる葉はかるく
嘆きは深しわが身のみ

春のわかれ

韓晋公かんしんこうが浙西を治めていたとき、戎昱ぶろうじつは内部刺史の役でした。郡に歌のうまい、うつくしい妓がいました。昱はかねてからこの妓をたいへん愛していたのです。

浙西の音楽長はかの女の才能を聞きこみ、晋公にぜひ側近に召し呼ぶようにと勧めました。昱は未練がましいこともいわず、湖のほとりで別れの宴を催し、

「向うにいつて歌を唱わせられたならば、かならず最初にこの詩を唱うがよい」と、一首の詩を贈りました。

やがてかの女は晋公のところに着きました。韓はそのために酒宴をひらき、自分で盃を手にし、歌を唱って酒を注ぐことを命じたのです。

昱の例の詩を唱いました。唱いおわると韓はたずねました。

「戎刺史はお前を深く思っているのか」
かの女はかなしげに立ち上って、

「はい」と答えると、あとはもう涙です。

韓はかの女に着ものをきかえ、命令を待つようにといいわたしました。どういうことになるのかと、なみいるものたち

は気が気でありません。韓は音楽長を呼んで、はげしい口調で責めました。

「戎刺史は名士でありながら、田舎の一妓に思いをよせているとは、なみなみならぬ愛情だ。それを知らん顔して側近に呼びよせ、わしにとんだ過ちをさせるとはなにごとだ」とばかり、音楽長は鞭で打たれました。

一方、妓は百匹の絹を賜った上、ふたたび帰ることを許されたのです。

昱の詩というのはこういう文句です。

湖上のわかれ春の風

情をつなぐ柳かな

このかなしみを驚は

知るやしきりに音に啼きて

柳の縁

韓翃かんこうは若いときから才人の評判の高い人物でした。天宝年間てんぽうの末、進士の資格を得ていました。孤独を守りしずかな性格で、つきあっている人たちというのは、みなその当時の名士ばかりでした。しかしその住居はひどいあばら屋で、ほんの雨露をしのぐというほどのものです。その隣りに、李将の

もちものであった柳氏という妓が住んでいました。李はやってくるたびに、かならず韓を招いていっしょに飲

むのがつねでした。韓もまた李が度量の大きな、男らしい男であつたのでいつもかれのいうとおりにしていきまして、久しい間にいよいよ大の仲よしになりました。

柳が暇なときに壁の穴から韓の様子をのぞいてみますと、これはみすばらしい住居ながら、訪ねてくる人はというときままって名士たちばかりです。そこであるとき、李に向つていきました。

「韓さんはひどい貪乏ですが、つきあいはきままって評判の高い方々ばかりですわ、あの方、きつといつまでもあんなくらしをしてゐる方じゃないと思いますの、助けておあげになつたら？」

李ももつともなごとだと、これを承諾しました。それから中一日おいて、酒肴をととのえて韓を招きました。大分酒がはいったころをみはからつて、李は韓に向つていきました。

「君は当今の名士であり、柳氏は当今名だたる美人だ。美人と名士とを組みあわせるのもわるくないと思う。」

柳氏にいつつけて韓とならんで坐らせました。韓のほうでは一向気がないようで、しきりに辞退しました。李は、

「男と男とが酒くみかわして話した上は、ほんのひと言気もちが通じあつたところがあつたにせよ、命も惜しくないというはず、ましてひとりの女を惜しむなんていうことがあつてたまるものか」といって、とうとう無理押しつけに柳氏を韓にあたえたのです。まったくことわりようもありませ

ん。そして韓に向つて、

「君は貧乏のどん底ぐらして、自分ではどうにもあがきがつかないでいる。幸、柳氏は数百万銭の金をもっているから、それを利用してしのぐことができよう。柳氏は貞淑な女だから、君に仕えて結構忠実にやってくれらうよ」というと、ていねいにおじぎをしていってしまいました。

韓はいつた人は追いかけていってさしとめようとしました。が、さてふりかえて考えてみれば、なんということもなくこんなふうにも迷いが出て――、

「あの男らしい男が昨夜ことをわけていった以上、変に勘ぐるのはまちがっているな」と、われとわが身にいい聞かせ、柳氏の住居にはいりこむことになりました。

かれが名をなしたのはその翌年のことです。そののちちょいちよいよ淄青節度使の侯希逸に、自分の登用方を懇請しました。侯の上奏の結果、韓は従事に任命されました。

おりもおりとて世情が不安でしたから、柳氏を伴わずに韓はひとりて任地におもむき、かの女は都にのこしておき、時期がきたら迎えることにしました。ところが三年間も迎えることができないうでしまいました。そこで多額の金を出して練り絹の袋を買い、そのなかに次の詩を封じておきました。

柳や柳そのかみの

青きいろいままおありや

むかしながらに枝垂るるも
にくや手折りしひとやたれ

柳はさっそく返事を書きました。その答詩はこうです。

春の柳は旅立ちの

ひとに縮ねておくらるる

落葉の秋に君訪うも

折るにたえぬや身の細り

柳氏のうつくしきは有名でしたから、ひとりぐらしではとうてい身を全うすることができないものと知り、剃髪して尼となり、寺にはいろうと思いました。

そののち韓翃が侯希逸にしたがって上京したとき、あっちこっちたずねましたが、かの女の話はわかりませんでした。実はとくに功勞のあった外人將軍の沙吒利に脅かされ、もっぱらかれの寵愛をうけていたのです。

翃はかなしみましたけれども、どうすることもできません。たまたま中書省にゆくことがあり、隅櫓の東南の角まできたときです。

ひとつの小牛にひかせた車が、ゆっくり後からついてきました。

車のなかから声がかかるではありませんか。

「青州の韓員外さまではありませんでしょうか」

「いかにもそうですか」

車の簾がさつとあけられて、

「わたくしは柳です。沙吒利に身をまかせてしまい、いまさから逃げるわけにもいきません。明日もこの路から帰りますから、ぜひもう一度ここをお通りくださいませんか？　そしてお別れしたいと思います」

感動した韓は、いわれたとおりその翌日そこにいってみますと、小牛にひかせた車がやってきました。車のなかから紅いきれにくるんだ小さな蓋ものが投げられました。その蓋ものなかに、においのいい練膏がはいっています。

「もう永久にお別れですわ」

あとは嗚咽の声です。車は雷のような音をたてていってしまいました。

韓も我慢がしきれず、思わず涙を落しました。

その日、臨淄大校の役をしていた人が、都のある料理屋に席を設けて韓を招いてくれました。出席はしたものの、韓はかなしくて、滅入りきっています。

「韓員外はおいろ気その他の話上手で、いつだって愉快なのに、今日はどうして沈んでいるのだろう」と、同席のものから怪しまれました。そこでかれはこと細かに話をして聞かせました。

眞候の将許俊という青年、若いに似げなく酒好きでした

が、
「ぼくは自分でも俠気のある人間だと思っています。どうか員外自筆の短かい手紙を書いてください。すぐさまいって手